【読楽】019 「日新館童子訓」を読む　＊読楽箇所＝序文および本文冒頭

［会津藩の教育］

○日本最高水準の教育が行われた会津藩　＊以下、早乙女貢『会津藩校日新館と白虎隊』(新人物往来社)等を参照。

・幕末諸藩の教育は、会津藩校「日新館」と佐賀藩校「弘道館」が東西の双璧とも言われる。

・弘化3年～慶応元年(1846～65)の20年間に、昌平黌の書生寮に入寮した出身藩別人数は次の通り。

第1位	佐賀藩	35万7000石	40人
第2位	仙台藩	62万石	21人
第2位	薩摩藩	77万石	21人
第4位	会津藩	23万石	19人

［6歳～「什」の教育］

○什＝藩校入学前の男児(6-9歳)が所属した地域組織(全9班)。

・什長率いる集団生活(お話し・遊び)。　・什の掟(ならぬことはならぬ)による日々の反省。

【什の掟】 ＊各班で多少の違いがあったが、最後の「ならぬ…」は共通

一、年長者の言うことに背いてはなりませぬ。

一、年長者には御辞儀をしなければなりませぬ。

一、虚言(うそ)を言うことはなりませぬ。

一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ。

一、弱い者をいじめてはなりませぬ。

一、戸外で物を食べてはなりませぬ。

一、戸外で婦人と言葉を交えてはなりませぬ。

ならぬことはならぬものです。

【什の罰】

①無念……軽い場合。「無念でありました」と言って、みんなに手を突いて詫びる。

②竹篦(しっぺい)……重い場合。罪の軽重で回数を変えてシッペ(仲良しでも手加減禁止)。

③派切(はぎり)……仲間はずれ・絶交 → この場合は両親か兄が付き添いで什長に詫びて(あやまり役)制裁解除。

④手炙(てあぶり)……違反者の手を火鉢の上にかざし、仲間が鼻の脂を違反者の手に付ける。＊例外的

⑤雪埋(ゆきうめ)……雪に押し倒し、雪をかける。＊例外的

＊会津若松西ロータリークラブは、大人自身が襟を正して社会のルールを守り、「ならぬことはならぬ」と言える勇気を持ち続けることを提唱する「NN(ならぬことはならぬものです)運動」を展開。

［10-11歳～会津藩校「日新館」の教育］

・5代藩主・容頌(かたのぶ)の藩家老・田中玄宰(はるなか)による藩政改革の一つ。建設資金3000両の殆どを豪商・須田新九郎が負担。今で言う文部官僚から学生まで草鞋履きの土木作業。5年で完成。享和元年(1801)9月29日開校。

・①什長率いる集団生活・集団登校、②多彩な教科、③最古のプール(水練水馬池)、④学校給食など先駆的なシステム。

○日新館の教育課程

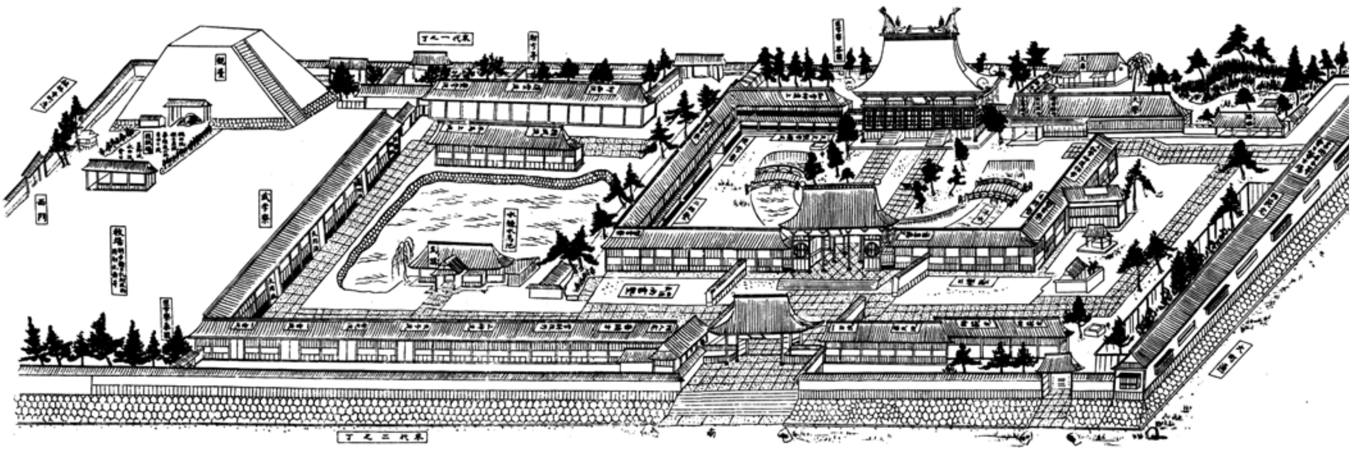
①素読所(小学)＝花色紐組(はないろひもぐみ)(正規の武士身分)以上が10歳から入学。礼法(10-15歳)、書学(13-)、弓・馬・槍・刀(14-)、会読・講釈聴聞(16-任意)、兵学等(17-任意)等を学ぶ。4等から1等まで。

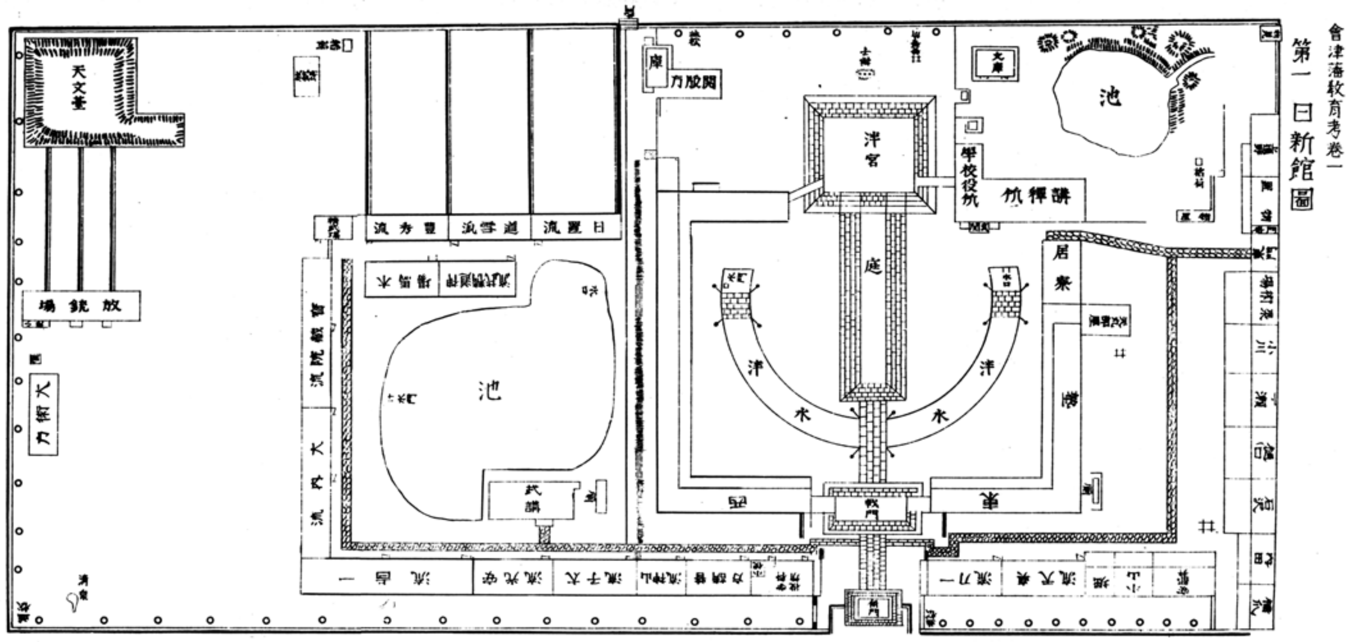
②講釈所(大学)＝素読所第1等修了者のうち選ばれた者が進学。下等から上等まで。優秀な中等生は、江戸(原則昌平黌入学)や諸藩への遊学。優秀者は外国留学も。

③専門学科＝神道、皇学(国学)、和学(歌学)、書学、礼式、茶道、数学、天文、医学、雅学から選択。

④武術科＝弓・馬・槍・刀術は必須、その他は選択。砲術、柔術、居合、水練、武講(兵学)、土図(築城法)。

＊婦女子は家塾で学んだ。武芸では薙刀術が最も盛んだった。





［会津精神を育んだ『日新館童子訓』］

・5代藩主・松平容頌(在職1750-1805)作。文化元年(1804)4月11日刊行。

・会津藩独自の道徳教科書として、藩の要職者・日新館関係者と藩士全員に配布。

・日本古今の逸話75話(75話中19話は会津藩内の実話)に、儒教の言葉と容頌の解説を添える。

○陸軍大将・柴五郎が語る会津藩の教育

・明治33年(1900)の北清事変で義和団との攻防戦で活躍。諸外国から相次いで勲章を授与され、世界にその名を轟かせた。明治元年、10歳で日新館に入学。会津藩の教育を次のように述懐(佐藤利雄著『会津士道訓』)。

…余は入学早々、『童子訓』の教授を受けたりしが、此の『童子訓』こそは余の生涯に重大なる影響を及ぼせる書と言ふべく、屡々朗読する間に多くは其の文句を暗記せり。(中略)余は戊辰の役に家族の殉難に遭ひ、住み慣れたる邸宅は灰燼に帰し、爾来、流離顛沛(さすらいつまずく)、給仕となり、書生となり、食客となりて具さに人生の苦楚を嘗むるに到りしが、然も善く不善・堕落の道に踏入る事なく、大過なく今日あるを得たるは、一に藩教育の賜に外ならざるなり。即ち六歳より施されたる「ならぬことはならぬ」藩独特の訓育・錬成と、其の取扱ひに於ても鄭重を極めたる『童子訓』によりて、忠信孝悌の大道を教へられたる結果なり。実に『童子訓』は、会津藩政時代、会津学生が各々其の一生涯を通じて最も深き感化・影響を受けたる書にして、彼の白虎隊士の如きも皆、本書によりて「戦陣に勇なきは孝に非ず」と、烈々火の如き士魂を鼓吹せられたるものなる事を知らざる可からず。

＊跋文で、『日新館童子訓』が「全会津人の中心教典となつた書」と述べ、後に東京帝国大学総長となった山川健次郎や、『旧夢会津白虎隊』の著者・永岡清治など、明治に生きながらえた旧会津藩士の誰もが『日新館童子訓』を精神的な支えにしていたと記す。

[『日新館童子訓』の概要] ＊月刊『武道』の拙稿を一部改訂・抄録。

『日新館童子訓』は、会津藩第5代藩主・松平容頌(かたのぶ)が儒者・神道家達の協力を得て執筆した後、幕臣・屋代弘賢(やしろひろかた)の校訂を経て、老中・松平定信の享和3年(1803)3月の序文と、日新館開校にも関わった熊本藩儒・古屋昔陽(ふるやせきよう)(古鬲(こかく)・鬲(かなえ))の享和3年4月の跋文を付して文化元年(1804)4月に刊行、藩の要職者や日新館関係者を始め藩士全員に配られた。

その内容は、『小学』の編集方式にならって日本の「嘉言善行」を集めた修身書で、儒教経典からの引用と容頌の解説を大字で、孝子・忠臣等の逸話を小字で綴る。漢籍からの引用は白文の漢文で難解だが、そのほかは平易な仮名交じり文で、漢字には多くルビを施すため読みやすい。また、全て日本古今の逸話で、上は神・天皇から下は農工商までの75話を集めるが、うち19話は会津藩領の実話である。身近な先人の実例は読者に深い感銘を与え、実践を促したであろう。

上巻冒頭で、「父母これを生じ、君これを養い、師これを教う。父母にあらざれば生ぜず、君にあらざれば長ぜず、師にあらざれば知らず」と三大恩を説き、「これらの大恩に報いることなく、父母に孝なく、兄に悌なく、主君に忠なく、師に敬なく、友に信なき者は、たとえ万巻の書を諳(そら)んじ、多能多芸であっても何の役にも立たない」ため、「『幼成(ようせい)天性の如く、習慣自然の如し(幼時の躾は生まれ付きのようになり、習慣は自然と深く染まって本来の性質のようになる)』という言葉のように、日々の行いや主君・父母・師に仕え朋友に交わる際の心得を以下に記した」と本書のねらいを明らかにし、以下、日本の孝道が神代から始まる例証としての天忍補耳尊(あまのおしほみみのみこと)の孝行や、命がけで主君を諫(いさ)めた越前松平家の家老・杉田壱岐(いき)の逸話などを順々に紹介する。

初代藩主・保科正之(ほしなまさゆき)は、寛文8年(1668)制定『会津藩家訓(かきん)』15カ条の第1条で「一、大君の儀、一心大切に忠勤を存ずべく、列国の例を以て自ら処(お)るべからず。若(も)し、二心(ふたごころ)を懐(いだ)かば、則(すなわ)ち我が子孫に非(あら)ず。面々決して従うべからず」、すなわち、会津藩は将軍家の分家として、いかなる場合も諸藩に同調することなく幕府を支えるべきで、万が一、二心を持つ藩主なら我が子孫ではないから、決して従ってはならないと厳命した。容頌が『日新館童子訓』の第67話に『武田信繁家訓(たけだのぶしげかくん)』を引いたのも、「たとい海は野となり、野は海となるとも、尽未来際(じんみらいさい)、御屋形(おやかた)(信玄)に対し奉りて二心あるべからず」と兄に絶対の忠誠を誓った第1条が『会津藩家訓』と重なり合ったからに違いない。

「ならぬことはならぬ」は、決してブレない士道の起点であり終着点であった。そして、他藩に例のない修身教科書と、幼児から成人まで一貫した独自の教育システムが会津精神を藩内に浸透させた。

●テキスト等 ＊②の翻字資料(抄録)を読みます。①の原本も適宜参照ください。★がダウンロード資料で、他は参考文献です。

★①『日新館童子訓』(原本＊全冊)

★②福島県教育会編『日新館童子訓』(昭和18年3月＊抄録) → 全文を翻字(句読点、濁点を適宜加え読みやすい)。漢文には書き下し文も付記。

③佐藤利雄著『会津士道訓 新釈日新館童子訓』(昭和19年6月) → 会津藩の教育の概要にも触れ、『日新館童子訓』全文の翻字に詳細な語注を付す。

④松波節斎著『会津論語』(昭和12年12月) → 『日新館童子訓』の平易な現代語訳で読みやすいが、全文ではなく抜粋。多くは容頌のまとめの部分が中心で、逸話をしばしば省略する。会津藩祖、保科正之と家訓(かきん)15カ条も紹介。

⑤土田直鎮(なおしげ)訳『日新館童子訓』(昭和59年8月) → 平易な現代語訳と原文の両方を載せる。語注はなく、跋文の漢文については書き下し文を割愛する。

⑥中村彰彦訳『武士道の教科書』(2006年12月) → 平易な現代語訳であるが、重要な序文を省いたり、現代語訳に意訳を加えていて原文と異なる箇所が少なくない。原文を正しく理解するためには、ほかの翻字を参照する必要がある。